

大学生の信頼感について—恥と罪悪感が与える影響—

Effects of shame and guilt on trust in university students

聖徳大学大学院臨床心理学研究科

1000-090720 内藤 真紀

指導教員 細井 啓子教授

問題と目的

近年、青年期の友人間には“希薄化”が指摘され、人を信頼できず、自己の内面を開示するような深い関わりを回避する傾向があると、松永・岩本(2008)は述べている。このような事象の背景には、発達段階として漸次的に達成してきた課題である恥と罪悪感が、人の人生における様々な出来事によって、再び葛藤状態に陥ることも要因の一つと考えられる。罪悪感(guilt)とは、Tangney, Wagner, Fletcher & Gramzow(1992)によると、後悔、良心の呵責、“悪いことをしてしまった”ことへの失望を意味する。恥(shame)とは、Jacoby(2003)によると、自分が頭のとっぺんから爪先まで全く無価値で下らない人間であると、価値付ける感情である。この二つの感情は、いずれも内省的な特徴を持ち、何らかの基準に基づいて自己を評価する働きがあり、他者の迷惑をかけたり、人前で失態を見せたりといった集団や社会への適応が問われる危機的場面で喚起される感情であることが共通している。本研究は、恥と罪悪感がどのように解消されてきたかによって、現在の自分や他者に対する信頼感に影響を与えるかどうかを検討することを目的とした。仮説として、①恥と罪悪感を抱きやすい者は、他者や自分に対して信頼感を抱きにくい、②恥と罪悪感を抱きにくい者は、他者や自分に対して信頼感を抱きやすい、の二つを設定し調査を行った。

研究 1

方法

2010年7月上旬、都内の私立大学2校の大学生を対象に質問紙調査を実施し、質問紙に回答した有効回答者165名(男性48名、女性117名、平均年齢20歳、SD=1.06)を分析対象とした。質問紙は、フェイスシート(調査に関する注意書き、年齢、学年、性別の回答)、罪悪感尺度、恥尺度、信頼感尺度(天貝, 1995)の3つの尺度によって構成されていた。罪悪感尺度は罪悪感喚起状況尺度(有光, 2006)、恥尺度は状況別羞恥感情尺度(成田, 1990)を参考に、新たな項目を追加したものを用いた。また、「罪悪感を一番抱きやすい相手」「罪悪感に影響を与えるもの」「恥を一番抱きやすい相手」「恥の捉え方に影響を与えるもの」について選択式で回答を得た。

結果と考察

罪悪感において、男性では友人、母親、父親に対し、罪悪感を抱きやすい人が多く、女性では母親、友人、恋人に対し、罪悪感を抱きやすい人が多かった。恥では、罪悪感と異なり、男女共に家族に対して恥を抱く者は少なかった。全く知らない人やクラスメートといったように心理的距離のある相手に対して、恥は抱きやすいようであった。また、友人に関しては、心理的距離は近くも遠くもなく、恥も罪悪感もどちらも抱く対象になりやすいことも明らかになった。また、罪悪感についても恥についても、宗教の戒律が影響を与えていることは見受けられなかった。

*t*検定、因子分析、重回帰分析の結果から、男性において、恥尺度の下位尺度である「気恥ずかしさ」が信頼感下位尺度の「自分への信頼」に対する負の標準偏回帰係数が有意 ($\beta = -.48$, $R^2=.24$, $*p<.05$)であり、自分の知られたくない部分を露呈してしまうといったこと等で気恥ずかしく感じる度合いが強いほど、自分への信頼感は低くなることが明らかになった。また、恥尺度の下位尺度である「かっこ悪さ」が信頼感尺度の下位尺度である「他人への信頼」に対する負の標準偏回帰係数が有意 ($\beta = -.36$, $R^2=.15$, $*P<0.1$)であり、髪型や服装が整っていないかったり、一緒にいる家族や友人が失態を演じてしまう等、人前でかっこ悪い思いをした度合いが強いほど、他人への信頼は低くなることが明らかになった。

これらのことから、男性でのみ仮説1は支持された。恥尺度と罪悪感尺度の各下位尺度得点について男女間で比較すると有意差があり、女性の方が男性よりもちょっとしたことで恥と罪悪感を抱きやすいが、男性は一度大きな恥を経験すると、他者や自分に対しての信頼感が揺らいでしまうことが検証された。罪悪感を抱くことが信頼感に負の影響を与えないのは、罪悪感は恥ほどうつや不安などの精神的健康に負の影響を与えやすい(有光, 2001)わけではなく、自己の核となるアイデンティティや自己概念にも影響を与えない(Lewis,1971)という知見からも、罪悪感は信頼感を揺るがすほど大きな影響を与えることはないと考えられる。

女性において、罪悪感尺度の下位尺度である「他人への申し訳なさ」が信頼感尺度の下位尺度である「他人への信頼」に正の標準偏回帰係数が有意 ($\beta = .26$, $R^2=.10$, $**p<.01$)であり、他人に対して申し訳なく感じる度合いが強いほど、他人への信頼が高まることが明らかになったことから、仮説2は支持されなかった。罪悪感には自己の責任を受け入れ、謝罪などの修復行動を行うことで被害者の報復行為を和らげるという適応的な機能があり(Lewis,1971)、他人へ迷惑をかけてしまったことで信頼感が揺らぐことはなく、むしろその

相手に対して裏切るべき相手ではないと理解し、信頼感が高まるのではないかと考えられる。恥についても、男女共に、仮説2を支持する結果とはならなかったことは、恥を抱きにくいからといって、他者や自分に対して信頼感を高める要因とはならないと言える。

恥と罪悪感の高い相関を示しながらも、その差異は存在し、恥は不適応的な機能を持ち、罪悪感 は 適 応 的 な 機 能 を 持 っ て い る と い う e.g.Tangney(1995a,1995b)・Tangney&Dearing(2002)の知見を支持する結果となった。

研究2

方法

恥と罪悪感が信頼感にどのような影響を与えているのかを詳細に検討するため、自由記述による調査を行った。回答者は研究1の回答者のうち、都内私立大学生15名(男性5名、女性10名、平均年齢20歳、SD=1.48)であった。信頼感得点から高群低群に分け、さらに恥と罪悪感得点から高群低群で分類し、各群ごとの記述について、質問紙で回答した項目の特徴を元に考察した。

結果と考察

群ごとの記述には、はっきりとした特徴の差があったというわけではなく、信頼感に影響を与える要因を恥と罪悪感を抱くタイプの違いからは探ることは難しかった。しかし、男女間においては記述の仕方や内容には差が見られた。男性は女性よりエピソードを具体的にかつ長く書かれていたことから、自己の失敗を忘れられず詳細に覚えており、男性の方が女性よりも恥と罪悪感を一度強く経験すると、信頼感を大きく揺るがすという研究1の結果を裏付けるのではないかと考えられる。また男女それぞれの特有の内容として、女性ではダイエットに関する内容が罪悪感を抱かせやすく、男性では食事を奢る奢られるという内容が恥と罪悪感を抱かせやすいことが表れており、男女によって恥と罪悪感を抱かせた状況は異なることが示唆された。

今後の課題と展望

本研究における今後の課題と展望について以下6点を挙げる。

第一に、本研究では恥尺度と罪悪感尺度を既存の尺度を元に作成したが、質問項目によっては恥を抱く内容なのか、罪悪感を抱く内容であるのか、回答者の識別を混乱させる項目

があったと思われる。恥と罪悪感という概念は互いに相関が高く、完全に別個のものとして扱うことは難しいが、両者を似て非なるものと捉える立場から、今後項目作成をする研究が必要であると考えられる。

第二に、研究2において明らかとなったが、男女で恥と罪悪感を抱かせる状況が異なることが示唆された。本調査は男性の少ない学科の授業で調査を行っており、恥によって信頼感が揺らぐことも、特に男性であることから、男性の特有のテーマとしてより詳細に検討する必要があると考えられる。

第三に、恥と精神病理については正の相関があるものの、罪悪感と精神病理の間には相関が認められない(Harder et al., 1992; Tangney, Wagner, Fletcher & Gramzow, 1992)ことが分かっており、本研究の研究1においても、罪悪感は信頼感に正の影響を与えるという結果が得られている。しかし、研究2において、精神病理と罪悪感の関連を示唆するような記述があったこと、また Freud (1915)も神経症者について罪の意識との精神病理の関連を述べていることから、今後は罪悪感と精神病理との関連を探る研究を行う必要があるだろう。

第四に、本研究の目的として、恥と罪悪感がどのように処理されてきたかによって、現在の自分や他者に対する信頼感にいかほど影響を与えるかを挙げたが、恥と罪悪感がどのように処理されてきたのかは、幼少期からの具体的なエピソードを把握する必要があったと思われる。今後、恥と罪悪感をどう処理してきたのか、あるいはできなかったのかを面接や自由記述を通して、調査する必要があると考えられる。

第五に、研究2において、得られた回答に対する筆者の考察には、主観的になり過ぎたために、内容が矛盾してしまう箇所があった。質的な研究は、筆者の導きたい方向へ解釈がずれてしまうことがある事を認識した上で、論文指導者やゼミ生等に内容をより確認してもらったことは反省点である。

第六に、仮説として①恥と罪悪感を抱きやすい者は、他者や自分に対して信頼感を抱きにくい、②恥と罪悪感を抱きにくい者は、他者や自分に対して信頼感を抱きやすい、の二つを設定したが、信頼感を失ったからこそ恥や罪悪感を抱きやすくなる、あるいは信頼感があるからこそ恥や罪悪感を抱きにくいということも考えられた。今回は恥や罪悪感が信頼感に与える影響として一方向の調査を行ったが、今後研究を深める際には、逆方向の仮説を設定し、検討する必要があると考えられる。